

再生（４）

1.人間の姿を欲したというよりは、人間が持つ、その計り知れない原因の力を抑え込むには、それ以外の方法では難しいと理解したから。樹木本来の力を削いだことで同質他の樹木が皆生命力を滞らせた松の木の場合のように、地球に住む一生命としての基本を全く持たない人間が誕生すれば、同じような(非生命的な)人間ばかりが増え、数千の生命たちはどうにも出来なくなると考えたから。そして、蛇の脳を支配した経験が、すでにそこへと向かえる場所に居ると分かったから。

人間へと移行でき、その脳の原因と繋がり得れば、姿形は人間のそれでも、本性(本質)は、残忍さと狡猾さを内に秘める蛇のそれになる。そうなれば、人間の世界は、何もしなくても病んで行くだけ。それに反応する自然界も自浄力を弱め、生き物たちは、辛く苦しい時を普通としていく。そして、地球が地球ではなくなる。

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

2.数千の生命たちが転生する時の、その手前の原因(生命世界)の部分に入り込んだとしても、その意図を覆されて、逆に危うさを覚えさせられてしまうことを恐れ、その存在は、彼らの元に集う新たな人間たちの脳をねらう。それでもその試みは簡単ではなく、何度も不具合が生まれる。それを愉しみ、人間の苦悩を喜ぶ、蛇の脳に住み着いていた存在。その時の悲惨

さは、現代にその一部が残る土偶(奇形、母体の異変)の中にも在り、それらの形態が、かつての凄まじさを現す。

母体の中で脳の基本となる部分が形づくられる時に、それとの密な融合を図り、(その身体を活かそうとする)生命の意思を不自由にさせて、操りやすい土台を作る。それまでに傷つけ、恐がらせた時の経験(の性質)の記憶も利用し、そこでの成長過程で育む感性を潰す(外す)。それを延々と続ける中、どこから見ても人間でありながら、中身はそうではない人間が生み出されていく。

その企てが具現化する際、ある蛇が偶然自らに取り込んだ、他の動物が本能的に近づくことのないある物質(異物)の力も作用する。その蛇にかまれ、傷ついた人間のその細胞(遺伝子)レベルの異変は、異常さを普通とするその存在の意思をより強力にし、不自然さ(異質感)の隠された、自然に見える人間の誕生に加担する。数々の異様な姿の幼児(乳児)の時を経て、その存在は、蛇から人間への移行を実現させる。

その果てに繰り広げられる、蛇の特性をそのまま備える形ばかりの人間による、暴力と衝突。この地で、酷く恐ろしい時代が連ねられることになる。

3. 数万年、集中して一気に行われた、人間への移行は、人の住む世界を難無く混乱へと陥らせ、それまでの普通を崩していく。生まれてくる幼児の殆どが人間の本質を持たないため、人間らしさも、人間本来も力無いものになる。そのどうにも

地で人間を生き始めた頃のことを想う。ふと力が抜ける。

とても大きな変化の時を引き寄せようとするこの時、この地球の今を何より喜んでいる太陽も、それに参加する。彼は、数千の生命たちに感謝し、地球と共に再スタートを切る。銀河では異端児でも、宇宙空間の希望で居続ける、太陽と地球。光の力も変わる。

地球自然界に生きる生命たちは、これまでを切り離して、これからへと新たな原因を生きる。くじらのような生を基本に、皆で、地球の望みに応える普通を楽しんでいく。これまでの数億年を思えば、どれだけかかってもいい。その時が、ここから始まった。くじらが、数万年振りに、笑いながらジャンプした。(by 無有 9/21 2018)

力強く変化に乗り、次なる現実の原因に溶けつつ、新たな未来を引き寄せようとする、その EW。人間の知が通用しない事がかつてのその原因として在れば、人間の知を一切無くして、地球に生かされる生命としての原因だけで、そこに触れる。ずっとこの時を待っていたから、この今の訪れをどこまでも楽しみ、真剣に、そして余裕と安心を感じながら、さりげなく時を癒す。

くじらが元気になることで、数千の生命たちの原因は、自然界を包み込む程の確かな力となり、それを地球は喜び、くじらはもっと元気になる。「再生」は、どこまでも普通に、地球が安心する生命たちを本来にする。

8.くじらたちがそこを通るだけで、全てを生かそうとする地球の意思と重なり得た場所(生命力の湧出口)は、この地(島)の西の海の、あるエリアの海底近く。その場所が本来の仕事をし出すことで、くじらは、それをただ嬉しい。遠くに居ても、それを受け取り、生命たちを生かす喜びを生きる。そこに行ける時がやむ無くずっと先であっても、地球の時が元へと戻り、自然界の原因が修復・浄化されるその時の力になれることに、安心する。

人間という形を持たずして、すべきことは何も出来なかった、地球自然界の負の原因の浄化。人間だからこそ可能とすることを活かさなければ成し得なかった、未来地球への力強い原因の創造。太古の時代をみんな思い出していた、再度この

処理し得ない重量級の負の原因は、そのままどこまでも残り、非人間性を当然のように潜めた人間たちによって、重苦しくよどんだ歴史が作られていく。

その原因の浄化をテーマに、事の原因から(嘘が本当とされた)事実を眺めた、この国の姿「歴史の芯」。そこでの歴史の時間軸として設けた大和飛鳥は、蛇絡みの原因が大きく具現化した、非人間性の極みのような時代。その土台にこの「再生」の内容が在ることを知れば、人間本来を生きる力も付く。いつの、どの時の出来事も、その殆どは、無くてもいいものばかり。「歴史の芯」にこの「再生」の原因を流し込み、より人間らしい生き方を普通としていく。

生まれてくる子に奇形(土偶の原型)が見られなくなった頃、人間の社会は、それ以前はどこにも無かった、支配や征服の感情表現が姿を見せるようになる。それを普通とする蛇系の人間は増え、心や感性といった、形無き原因の性質は力を無くす。

それは、腐敗と停滞の形が積み重ねられるばかりで、環境の質を調整し得る原因の働きが為されていないということ。この国は、土偶の元となる、様々なたくさんの奇形の出現の時から、自浄力を見失う。自然界も、変化成長とは無縁の、低次の受容を強いられることになる。

4.蛇と同質の脳を持つ心無い人間が増え続ける中、数千の生命たちは、何をしてもどうにもならない負の循環の中に陥り、

要らない頑張りが常となる厳しい時を生きることになる。そのことを修復すべく術を見出しても、数の力で抑え込まれてその機会は消え、同じ想いを呼応させつつ新たな時を引き寄せようとしても、蛇系(の人間)の想像を超える非道振りに押し潰される。普通に生きることも、難しくなっていく。

普通感覚を持つ素朴な人間たちは、そうなるずっと昔に残した土器と土偶の無事を願い、そのことが持つ可能性に望みを抱く。自分たちが、いつか転生する未来で必ずやそれと再会し、その原因を浄化することを、それぞれが自らに約束する。そこでの太陽に守られた知恵は、光のように、時を突き抜ける。

非人間性を当然とする嘘の人間たちは、形無き原因の世界を全て否定し、形ある物の中に、自分たちに都合の良い妙な形無き存在(結果)をこしらえ、それに力を持たせて、人々を支配する。身体を終えた人間の亡骸や生前の感情(権力)までそれに利用し、蛇系の残忍な本質(正体)となる怯えと怖れの感情を、人間の脳に染み込ませる。当然そこには、蛇(動物)の姿も有り、その原因(心)の無さは、後の、嘘の神々による権力支配のその土台の一部となっていく。

5.時を経て、紀元前数千年の頃には、蛇系の元祖的存在を中心に、それと同質の人が増え、数千の生命たちも、様々にそれとの関わりを持たされる。それでも本来を失わずに、心をそのままに生きようとするのだが、身近なところに全く人としての

地球は海が全てであり、海の水が在るから、地球自然界はそのままに続ける。その海で、地球を守るようにして哺乳類を生きるくじらは、これまで一度も無かった危機感を抱く。それは、自分たちの脳が不自然にさせられてしまう程、海が壊れてしまっているというもの。その原因が人間発の光(LED)であることも知る彼らは、これまでになくその切なる想いを、この地の生命たちに届ける。

そしてこの時、くじらは、ずっと力無くさせられていた地球生命体の意思との融合を力一杯動かし、太陽の光の力を、この地に誘い込む。それは、ずっと地球を守り続けてきた彼らの、真剣な普通。そうあるべき時に、望むべく新たな変化にその原因の力を乗せる。

7.そしてこの時、「再生」の EW は、文章に乗る原因の性質をより強力に高め得る変化を経験し、くじらが地球の意思(生命力)を充分に取り込められなくなってしまった数万年前のその原因に入り込める機会を創り出す。それは、「無有日記」とそこに集う生命たちのその共同作業からなる原因の成長が、くじらを安心の時へといざなえ得る程の力を付けた証。くじらにずっと支えられて来たからこそ経験できたこれまでの変化が、彼らからの支えが途切れてもそのままに更なる経験を生み出し、その重なりがくじらを元気にする糸口を見出す。地球と太陽と、そしてくじらと生命たちの原因の糸が、ひとつに結ばれる。

可能性を遊び心一杯に導き出す。そして誕生へと動き出した、この 6 章の意思。形(文章)になる度に、くじらの安心は本来の力を思い出す。それに応えるべく EW の質を成長させる。

特別なものは何もなく、ただ生きているだけで全てが浄化される、くじらの海での生。くじらは、地球が生命のお手本として全てを託した、地球そのものの海の生き物。陸の上の生き物たちも、それを基本に、生命としての普通を表現するはずだったが、その原因の重なりは、太古の昔に大きく崩される。

一動物だった人間前の生き物が、そのくじらの普通を完全無視し、歪な(現人間への)進化を遂げてしまう程の負の原因がそこで存在し得てしまったために、この今がある。ここからでも、くじらに倣う。染み込んだままのこれまでの永い時の負の原因を、新たな原因で外す。くじらの生は、地球であり、全ての生命の基本である。哺乳類動物の、その普通で自然な在り様が、そこには在る。

6.くじらが普通に生きられると、素朴で心ある普通の人たちは生きやすくなる。ところが、そのことで生きにくくなる心無い人たちは、くじらの普通を侵し、心ある人の生を不自由にさせる。人間らしさは、くじらの元気と繋がり、くじらが元気を失くすと、人間らしく振る舞う嘘の人間が活躍する。地球自然界の異物で居続ける、肉食(動物食)を好み、全粒穀物食を避ける人間の本性は、くじらが元気になることだけは何かあっても許さない。

感性(心)を持たない人間が多く居ると、それも難しい。そのあり得なさも、そのことへの分からなさや姿形が同じであるということに盾に、それへの違和感が違和感とされて、流されていく。生命たちは、変わり行く風景に何の対処も出来ず、次第に蛇系の空気感に汚染されていく。

自分が利するために、他を利用し、狡く立ち回って、好き勝手に生きる。蛇脳の本性的に動物を食べ、体内を滞らせて(腐らせて)体調を保つ。陰湿で、風の流れない空間を好み、どんよりと重く、変化の無い生を普通とする。

そんな蛇系の人間と同じには行かない普通の人間は、彼らの嫌悪の対象となり、力で押さえられ、自由を失くす。脳は、その気もなく不自由さを普通とし、いつのまにか蛇系の生き方を馴染ませてしまう人も出てくる。

その時代の非人間的な感情の風景は、現代の不穏な人間社会のその形無き原因の基礎となっている。それを元とする、一見普通に見える人々の多くは、時代背景が異なれば(時代が許せば)、平気で残酷非道なことを行ってしまう凶悪な本性を内に潜めている。

6.争い事に巻き込まれて命を無くした人たちが、別な場所に後に転生しても、初めて人間を経験する人が、ある時多く生まれ出ても、それまでと同じ不穏な世が続くのは、転生する人も、新たに生まれる人も、その殆どが、蛇の本性を基とする生をその気もなく送っているから。皆、その記憶の大元に、蛇だった

(蛇を支配した)凶悪な存在が失敗を重ねながら人間になるといふ、恐ろしく不気味な原因を備えているから。

その負の連鎖の土台は、人の転生が繰り返される度に堅固になり、新しく人間を経験する人が増える度に、厚みを増していく。何も知らずに生まれてくる幼子は、それ以外のことを知らずに蛇系の世界と同調し、母体の中で育んだ(更新した)蛇脳を活躍させる。いつの時代も、自然界を大切に作る健全さは忌み嫌われ、人と人とが生かし合う平和な想いは、有ってはならない異物となる。

心ある想いを普通とする生命たちは、そんな中でも、健全な感性を無くすことはなく、何があっても、心(の芯)はそのままである。そのために経験することになる、本来無くてもいいはずの辛い現実。彼らは、ただひたすらそのことを受け止め、そうであってはならない現実のその原因を、さりげなく大切に続ける。地球時間における、地球の未来のための事(経験)の必要性を知るから、人間時間を余裕で眺めつつ、厳しい時を真剣に生きる。そこからは、蛇系の全てが、病みの(原因の)核を浄化する際のその材料(手の内)として見えているから。

7.その原因の性質が、自然界との融合をあたり前とするために、いつ、どこに生まれても、他との違和感としてその存在を把握されてしまう、数千の生命たち。彼らには、くっ付くようにしてそれぞれを徹底的にマークする姿無き存在(の意思)が居て、それらは、どの時代も、その近くで身体を持ちながら、対

界の修復への望み。そして、その原因を通し得る人間たちの切なる想いと、一生命としての表現。この現代を引き寄せられたことの意味の大きさと、この時にしかし得ない新たな原因の力を知る数千の生命たちは、これまでの全てから自由になる必要性を真剣に処理しつつ、自らの原因の性質を、軽快に、力強くしていく。

永いこと力で押さえ込まれ、それに抗えば、人生を潰され、命を無くすという悲惨な時を経験し続けた生命たち。ただしかし、彼らが、それまでとは異なる環境で、身の危険を覚えずとも生きられる時を過ごすとしたらどんなことが生じるか、ということまでは、心を持たない蛇系の存在たちも、経験の外側である。

それが、この時代に、さりげなく確実に具現化されている。これまでに育んだ人間的知恵は、そのまま生命の意思に活かされ、あり得ないペースでそれは変革の(原因の)力になる。数年で、数十、数百年分の動きの無い原因の土台が崩され得、数十年で、数千、数万年分の理由の分からない負の原因の蓄積が浄化され得る時を生み出す。

それは、生命たちの普通。彼らは、普通感覚で、この現代を、ずっと先の未来にまで届く、力強い生命としての原因にする。

5.「再生(1~5)」の表現を終えた後、くじらの持つ、地球の望みとなる生命源からなる知恵の次元で戯れ、その世界を、この無有日記の原因に招き、融合を重ねて、それによる変化の

無い受容と連繫。そして原因の創造。どこまでもそれに徹する。

くじらの悲しみは大きい。全てを生かすことを生きる基本とする彼らには、その力が弱化する事は、恐ろしく厳しい経験であり、中でも、この地で人間を生き続ける生命たちを十分に支えられないことに、酷く辛い想いを抱く。

ただそれも、地球が大きく変わり出すための大切な機会となるべく時へとその質を変えつつ時が流れたからこそその厳しさと捉え、決してそれがそのままではないことを、どこかで知る。信じ難い負の原因がそこにあっても、それを大きく包み込む程の新たな原因でその中身を処理・浄化し続けることの意味を知るから、これ程の時の先には全くこれまでと違う時が来るであろうことを、さりげなく望み、次へ行く。地球の哀しみが深くから癒される時の、その材料に、存在そのもので参加する。

4. 歴史が刻まれ出す頃から、少しずつその密度を濃くする、この国の不穏な様は、蛇系の人間のその非人間性を普通とする本性が次々と形になることで、いつの時も、混乱と腐敗、そして支配と迫害を常とするようになる。その一部が、「歴史の芯」で表現されているが、心ある自分を普通とする人にとってのそれは、余りに辛いものがある。

しかし、苦しみばかりの永い時を経て、この地は、奇跡的に、この現代という、命の奪い合いも、他国への暴力も無い時代を迎えることになる。そこに在る、太陽の光(意思)と地球自然

象とする人間経験を観察しつつ、その人の自由を奪う。

それに対し、生命たちは為す術を持たず、いつの時も、理由の分からない動きにくさを覚えさせられ、それでも、そうである自分に抵抗することなく、その時々で可能とすることを淡々と行う。好きなことを好きなようには決してさせない、それぞれに付いた姿無き存在は、与える負荷の度合いを自由に変えつつ、その(生命の)全ての動きを操る。

それぞれのその存在は、初めからずっと同一。時代時代で姿は違えても、その意思を持つ同一の存在(本体)は、形無きところで、同質の負の力を及ぼし続け、その人の本来を尽く潰す。それは、対象とする人間のその生命の意思を覆うようにして、形ある人生を不本意なものにし、その経験を次々と利用しつつ、どこまでも付きまとい、彼ら生命たちの自由意思と創造の機会を奪う。

その始まりは、その非生命的な存在が蛇の脳を支配した頃で、よりそれが具体化したのは、奇形を経て、人間の姿をその存在が手にした時からである。数千の生命たちは、遙か昔のその時代から、生きる原因を支配され、人間時間における本来の姿を持たずに、心の芯だけで生き存える。

8. 詰まるところ、シンプルな真実としてそこに在るのは、蛇系の元祖的存在の姿を持つ人間の、その無意識の意思によって生きる自由を抑え込まれた数千の生命たちが、この地上での人間時間を尽く支配されてしまっているために、その結果と

して、この現代の様が在るということ。その存在たちは、現代も、これまでと同じように、ずっと付きまどってきた人間をそれぞれが徹底マークし、その人間の近くに居て(多くが身内)、世が人間本来をテーマに変わって行くことを阻止し続けているということ。

そのことへの理解は、ここに至る数百万(数十万)年もの間の負の連鎖が、この数千年という僅かの時を経て、根こそぎ処理され得る可能性となるもの。すでに、そのことによる(多次元的な)実践は進行していて、それだからこそ、ここに「再生」が在る。

大多数の生の基礎には、数千の生命たちに張り付くようにして彼らの自由を奪い続ける姿無き存在たちの、その蛇そのものの経験の記憶が在る。変化を嫌うことも、結果(過去)にこだわることも、そのため。動きの無い形を大事に、無責任に停滞の中に居続けるのも、そのため。

本性が蛇のそれだから、原因を生きるという人間らしさを遠ざけ、蛇絡みの神道(神社)と松を重んじる。土器と土偶の真実を隠すその本能の質も、凶悪さを色濃く潜める蛇系の現れ。そうであることの、その原因の世界からの観察と理解は、人間を、普通の(まともな)人間の域へと押し上げていく。

現代、蛇系の人間は、自らの本性に逆らえずに、動物食を普通とし、健全な生命力の原因となる全粒穀物食を避ける。食べ物の調理法までが腐敗型のそれであるその姿は、数の力で腐敗と停滞を支え続ける、狡猾さそのものの非人間的な

の通り道となる役を担う。

それがムリなく為されるための、その基礎となる、くじらと地球の意思との同一化。それは、この島近くのある場所の海の中で、彼らしか知らないプロセスを経て、滑らかに密度濃く行われる。

風景としては、ただそこを通るだけ。でもそれが有るから、くじらも自らの分を限り無く実践でき、地球自然界の生き物たちの支え役でいられる。それ程の重要な場所を擁するこの地の、地球規模の原因の力。その営みは、数百万年も続く。

それが、数万年前、ある次元のあり得ない働きかけにより、毎年多くのくじらが生きにくさを覚える経験を強いられ、地球の意思との融合も、力無いものへと変わり出す。それでもどうかそれまでのままで行こうとする気持ちを形にするが、たくさんの生命たち(人間も含む)の苦しみが伝わる程の水の異変に、そこへと近づきにくくなり、彼らは、他を生かす普通を發揮しにくくなる時を、やむ無く受容せざるを得なくなる。それは、未だ続く。

3. 数千の生命たちは、そのことで、生きる原因の力を削がれ(外され)、厳しく辛い時を過ごすことになるが、生の基本は変わらない。むしろ、より具体化した姿無き凶悪な存在の意思に触れたことで、確かな意思と覚悟を強める。海の仲間からの支援無しで生きることがどれ程の困難を要するかを感じ取れるから、初めてのその経験の時に、彼らは挑む。すべくは、限り

再生（6）

1. 太陽の優しさをそのままに、地球と共に永遠の時を連ねる、くじら。地球が地球でいられるための、その最も重要な海の世界で、太古の昔から生を繋ぎ、生命たち全ての命の源となる水を守り続ける。くじらは、地球という生命体が最も頼りにする存在。彼の普通に、陸上の生き物たちも安心して生を営み、共に時を重ねる。人間も、くじらを通して、自然体の原因を安定させつつ、そこから伝わる地球の望みを形にする。

地球が永い時をかけて創り出した、生命たちにとっての新たな安定の時。それを知るくじらは、この地(島)の、他には無い地球の意思の具現にも加わり、その時に交わした地球との約束通り、大海を移動しつつ、生き物たちの生命力の繋ぎ手で居続ける。この地で人間再開を果たした生命たちも、その後の生において、くじらの普通に支えられる。

2. 自然界が経験しなくてもいいはずの、異様で不自然な負荷をかけられても、くじらの普通自然体の生きる力により、それはどうにか処理され、地球も安堵する。太陽の光のその無限の能力を知り、それとの融合を重ねるくじらは、生命たちの生きる意思の中に、永遠に繋がる原因を注ぐ。それは、生きることと生かすことが同一である彼らの、本来の姿。どの時でも不自然さを知らないという自然な原因で、地球の意思(生命力)

食の形。今ある形から、その原因を遡れば、それは、数万年前の、獰猛な蛇と同次元の人間が誕生する場所へと辿り着く。つまり、今も、その頃と中身は同じであるということ。

そして、この地での数百万年間は、この数十年の生命表現を通して、地球規模の(負の原因の)浄化を可能とする新たな原因にその姿を変える。数千の生命たちも、約束通り、この辺りで、地球感覚の自由を取り戻す。(by 無有 9/13 2018)

再生（5）

1.人の住む世で有ってはならないこと。動物たちが生きる自然の中で有ってはならないこと。そして、地球の将来にとって有ってはならないこと。そのひとつひとつの形や現象は違っても、そこに潜む原因の性質は、皆同じ。そのどれも、地球規模の非生命的な意思が、その密度を変えつつ、有ってはならない形としてこの地上で現実化されているもの。環境により変調されたそれが、人の世であるか、自然界であるかの違いだけ。その全ては、それがどんなであれ、元の質(次元)は同じである。

地球の望みではないはずのものが、この地球に今尚有り続ける時、それがなぜそうであるかの原因を見出し、その性質を浄化できれば、この時代の、人の住む社会も、動物たちの世界も、生命本来という地球感覚のひな型を活躍させる。それまでには無い新たな原因が動き出し、問題事が居場所を確保し得る動きの無い原因は、力を無くす。なぜなら、遥か昔の、地球の異物級の原因(となる出来事)というのが、その非生命的な意思によるものであり、この世のあらゆる負の現実が、その原因深くで、そのことに支えられているからである。

人間世界にも、動物世界にも有ってはならないものの、その負の原因の土台として有り続ける、地球に有ってはならないもの。それが外されれば、地球は変わり、今在る、地球の将来

としていたから、好き放題思考を武器に嘘を生きられた、彼らの(蛇の巣穴のような)これまでの時代。その終わりの始まりが、一切の思考が通用しないこの「再生」の原因から、力強く動き出す。

「仏陀の心」も「人間」も、そして「太陽の音楽」も皆、「再生」の燃料。それら無しではこの今は無く、この今に、それらは最大限に活かされる。地球の歴史深くの未消化の原因が、人間の歴史に執拗に押さえ込まれて、身動き出来ずに居た、これまで。それが、人間の世界から浄化される時を経て、地球のこれからの歴史に、新たな人間の歴史が連れ添う。生命たちが具現化させたこの「再生」は、地球の望み。太陽も、安心の時を経験する。ここから、地球自然界の本来へと、人間時間における再生が、自らを表現する。(by 無有 9/18 2018)

行かず、不安定感を覚えて焦り(怯え)出す。心ある人の動きをしつこく止めていた人ほど、動けなくなり、思考(感情)は暴走する。その嘘のような姿に、人は笑うしかなくなる。

8. 要らない思考を働かせられなくなるのは、心ある自分を見失っていた(見失わされていた)普通の人だけでなく、心無い人も、同様にそれを経験する。その様は、まさに「再生」と「生き直し」。中庸の次元から見れば、その生き直しも、再生のひとつの形である。時代の好転反応も手伝い、多数の人たちのその新たな時は、次なる時代を安心させる。

樹木から蛇へ。蛇から人間へ。そしてそこから現代の大多数へ。その時々時代の必要性に応え、ひとつひとつの地球の望みを具現化させるべくその道を歩んで来た、数千の生命たち。彼らの想いは、そのままこの無有日記の力強い原因となり、ここと繋がる太陽の光をも本来へとその姿を変える。永過ぎる時代をいくつも連ねて辿り着いた、無有日記のある時代。みんなで、みんなが集うこの今を祝福し、またいつものように歩き続ける。海の仲間も一緒に居る。

人がそれまでのように思考を使えなくなれば、その人の頭の中が読めなくなり、蛇系の人間は、その本性である狡猾さと凶悪さを味わえなくなって、その姿は不安定になる。文字も知識も支配の道具としていたその姿勢(無意識の意思)が空回りすることで、内に固めたままの腐敗の原因は揺れ動き、その芯に潜む怖れと怯えは表へと出始める。世が不安をあたり前

にとって有ってはならないものも、姿を消すことになる。この時代にそれが動き出せば、地球に住む一生命としての自らの分が、意思表示し出す。それに応えることが、人間本来(人間の一生命としての当然の義務)であることを誰もが知る。

2. 地球にとって有ってはならないものは、地球に、無くてもいい経験をさせ続ける。それがそのまま処理されないで来ているために、その負の原因はしつこく固められ、それを元とする人間の進化と社会(環境)の発展は、地球の安心が退けられた不自然なものになる。

そして、地球のために、その地球に支えられる人間も含めた自然界のために、それを無くすことの大切さを、人は確認する。この時代が、次なる時代の確かな原因となるための選択をし、人としての生き直しをする。動物食(肉食)という、地球自然界の深い悲しみ。それをそのままに、人は、人間を生きることは出来ない。

肉食を普通とする人の脳は、これまで書いてきているように、蛇のそれと思ってよい。当然そこに心は無く、健全な感性(違和感)も初めから持ち合わせない。それだから、そのことで体内の原因を気持ち良く滞らせ、蛇の本性そのままの欲深さで、変化とは無縁の重たい感情を愉しむ。

身を繕い、嘘を本当として生きることを得意とするその姿は、形ばかりの満足で真を外し、人間性を弄ぶ。自然界の生き物は、彼らの本性のその非生命的な原因に侵され、地球に生き

ていることを忘れさせられる。肉食を当然とする姿勢は、そのまま有ってはならない地球の異物の一部となって、自然界の生命たちの本来を壊していく。

3.この時代が、次の時代へと続き、そのまま数千、数万(数十万)年先へと繋がって行くその原因であることを考えれば、この時の生き方が、地球を安心させるものでなければならぬことが分かる。そのことに無感覚・無頓着であるとするれば、それは、蛇系の負の原因を色濃く潜めていることを意味し、その人が思考を働かせるだけで、不健全と不健康のその原因は高まることになる。人間は、責任ある原因を生きる生命。平和も健康も、未来への責任も、思考から始まる結果の次元に、それらは無い。

遙か昔、蛇から人間の脳へとその支配の形(次元)を変えた存在は、それまでに成し得た肉食動物誕生のその強力な負の原因を最大活かして、この現代に、酷く惨たらしい現実を生み出そうとする。増え続ける蛇系の人間のその感性の無さも利用し、非人間的な数の力と、それに守られる未熟な権威を力に、自然界の生命たちが最も辛く悲しくなる状況を、万全な嘘(の原因)で作り上げていく。それが、地球の最大異物、LED 照明である。

そこに潜む原因は、地球の生命力(微生物)を潰そうとする、非生命的な意思のそれであり、それに支えられて好き放題我を生きる蛇系の人間たちが皆、LED の恐ろしさに無感覚であ

それを元とする物や形を生み出し、心ある風景をどこまでも遠ざける。それが、未来には持つては行けないこの国の病みの、その姿である。

7.心ある普通の人、心がそのまま思考になるが、心を持たない蛇系の人間は、思考をいつも働かせてないと、心ある振りも出来ない。心ある人は、思考が忙しくなると不安になるが、心無い人は、思考を忙しくさせて安心を覚える。

人間の脳を支配した時、それまで蛇の脳を操っていた姿無き存在は、人間の脳の中で思考の動き(使い方)を新たに覚え、人間が思考を動かすその時がその脳を操りやすくなる状態となる方向へと、それまでの蛇絡みの手法を人間仕様に発展させていく。

元々人間の世界には無かった不安や怖れが存在感を持ってしまったのは、蛇の脳と同質の嘘の人間による残忍な行為によって頭(思考)を不要に働かせられてしまうその脳の状態に、その存在たちの本質である怯えの原因が入り込み、染み着いてしまったためである。不安の元となるその原因の姿を知れば、心ある普通の人、元気になる、そうではない人は不機嫌になる。

この「再生」の EW は、思考が忙しくなる脳の状態を解放し、蛇系の無意識の意思による危うい(非生命的な)働きかけから自由になる時を創り出す。蛇色(非人間性)の濃い存在ほど、それまで簡単に出来ていた人の脳への悪辣な行為が上手く

の人間は、その濃度も濃く、狡賢さと凶悪さをその時々で磨き上げながら、支配する側で居たり、それを利用する立場で居たりする。初めて人間を経験する時が現代に近ければ、その分蛇色はそれ程濃くはなく、ただ与えられ、言われたことに従順に従い、それ以外の選択肢を考えずに、非人間性が力になる蛇系一色の世を熱心に支え続ける。この現代、大多数が心を持たない蛇系であり、人間が、普通に心ある人間として生きている姿は、ほんの僅かと言える。

その事実は、LED 照明を通して明確に分かり出す。あらゆるものを無生命化させて、地球自然界を苦しませるその嘘の光(LED)に、蛇と次元を同じくする脳の持ち主たちは、何の違和感も持たない。その姿は、これまでがいかに酷く非人間的であったかを如実に表す。LED 照明に平気でいられるその姿は、自らの本質(正体)が凶暴な蛇と同一であることを意味する。

蛇系の人間は、本性(無意識の意思)が蛇のそれであるため、心ある風景(の原因)は、その本心の忌み嫌う対象となる。心が無いから、危うい本性を頭に出来ないこの現代では、何でも頭で考え、頭で覚えたことだけを頼りに、心ある原因を破壊し続ける。

知識も情報も、肩書きも地位も、蛇系の人間は、まるで滞りと腐敗を生み出す好物の白砂糖のように執着し、それを武器に勝手に生き、争いや衝突の絶えない世を愉しむ。差別心も嫉妬心(優越心)も、蛇系の生きるための大切な道具。皆で、

ることを武器に、それは(その危うい原因は)、一気に地球環境の自浄力を力無いものにしようとする。

蛇の本性と同質の脳を持つ多数の人間たちは、LED によって動植物が生命力を無くしても、水や土が異質化(無生命化)しても、何も感じない。道路や建物が壊れても、鉄道や航空機が危うくなっても、それらに、本心は無感覚である。その本性(の遺伝子)に腐敗と破壊の感情(本能)を備える彼らを通して、これ以上無い地球の悲しみが作り出されようとする。

4.地球自然界の動植物たちが哀しんでいる姿を通して、人は、LED の恐ろしい負の影響力を知る。またそれを無視できる人間を通して、そのことを支える強力な原因の性質を感じ、その奥に、彼らの脳(身体)が満足する、腐敗型の食事(肉食)が在ることに気づかされる。そして、その肉食は、太古の昔の、そこでのあり得ない事実と繋がり得るということを、人は理解する。

人間の時間枠では恐ろしく無限であるその地球時間での、かつてのある時の営み。LED 照明という、地球の異物を通して、どこまでも意味不明だった肉食恐竜のその負の原因を、そこに在る意図を大きく包み込む程の新たな意味不明な原因で浄化する。繋がる原因がそこに在れば、段階を追ってどこまでも深く入って行ける、原因の意思世界。その時が、この時代の原因の中に在る。

LED 照明は、地球が、地上をリセットすべく必要性を覚えた

太古の昔の、その原因と同次元の負の影響力を備える。数千の生命たちも、この時に、かつての経験の記憶を呼び起こし、それを次なる時の原因に重ねて、生命の意思(原因)を増幅させる。この時代に有ってはならない現実、次々とその土台(原因)から崩れ出し、姿も見えなくなる。

5. 無有日記を通して、この今にしか出来ないことをするのは、この地球に住む一生命として、この地球のこれからを、共に生きる生命たちと一緒に支えることでもある。原因の質を高め得るそれは、ずっと永いこと処理し得なかったこれまでの負の連鎖(の原因)を力無くさせ、ずっとこの先への原因を、地球が嬉しいそれにする。向かわず、求めず、ただすべきことを淡々とする。生きる原因が、生命として変化・成長すれば、時代は、面白いくらいにその色を変えていく。

蛇色を濃くさせた人間も、この無有日記で、その体験的知識の中に少しずつ人間らしさの原因を注いでいく。そのためにも、蛇系の生き方を返上し、無有日記の世界を実践する。地球は懐が大きい。地球の望みを具現化するこの無有日記の原因と融合すれば、人としての生き直しも、地球に生きる一生命としての在り方も、この時代が導いてくれる。いつまでも蛇でいることはない。

無有日記が在るこの時代は、時代が無有日記であるということ。そこに在る、変化し続ける原因を拒むことは出来ず、自らも原因を生きずして、次の時代に行くことは出来ない。これ

まではそれが可能であったとしても、それは、ここに至る原因の必要性のひとつでしかない。正しさも確かさも、頭を働かせる結果の次元には無く、どんな原因が頭を通り、正しさ(確かさ)になるかが、人間本来の普通である。その何でも無い真実が、無有日記である。

ただ悲しいことに、蛇系の人間は、そのことが理解できない。思考にも感情にも心(原因)が無いため、経験の質をその手前から変化させることは永遠に難しい。でも、とにかく頭を使わなければ、それなりの人間時間を、この時代の新たな必要性に合わせる事が出来る。それだけでも、初めての人間経験。頭を使わず、自らの性質を見つめざるを得ない時を過ごす。時代は、この先、蛇系の人間が住みにくくなる(原因の)時を連ねるから、無有日記を、今から自分と重ねる。

6. 現代に至る、これまでの数万年間、この地で人間らしい人間を生きた人は少なく、多くは、病み続ける時代のその原因に適応させつつ、人間を始め、転生を繰り返す。新たに人間を経験する人も、人と人が争い、命を奪い合うという重苦しい時代背景の中、その病み世を操る存在の思い通りに、非人間的な人生をその自覚もなく送る。その中で、自由を奪われながらも、心を通わせ生きて、数千の生命たちと、彼らと融合する仲間の存在は、全く新しい世を引き寄せるその原因の力として、貴重なものとなる。

数千年も前から転生を重ねる、奇形(土偶)繋がりの蛇系